

音楽研究委員会

1 研究テーマ

表現する楽しさを味わえる音楽学習
～「リズム」に着目した歌唱表現の工夫～

2 研究内容（課題）

研究授業実施日 平成 20 年 11 月 19 日（水）
題材名 「リズムを感じて楽しく歌おう」
教材名 『音のカーニバル』『風になりたい』
指導者 齊藤 忠彦先生（信州大学教育学部 准教授）
授業者 浦野 由美教諭（日滝小学校）
授業学級 日滝小学校 4 年東組

音楽科では、「表現する楽しさ」をテーマに、音楽を特徴付けている要素である「リズム」に着目し、「歌唱分野」において研究を深めていこうと考えた。そこで、リズム学習を取り入れた事例から、以下の 2 点を課題としてとらえた。

- (1) リズムパターンのバリエーションを無理なく増やしていける手だて
 - ・ 4 分音符（休符）を主とした「もとなるリズムパターン」を複数提示して、そのリズムパターンと合わせて歌って、リズムと旋律の重なりを楽しむ。
- (2) リズム演奏と歌唱表現を結びつけた活動を可能にする手だて
 - ・ 歌の曲調にふさわしいリズムパターンのつなげ方を考えたり、そのリズムパターンの一部を変更してグループごとのリズムパターンを作ったりする活動を取り入れる。

3 研究の成果

(1) 指導の実際

- ① 「風になりたい」の 5 小節目からのリズム伴奏（1 小節分）を個人で考える場面
 - ・ 児童はリズムカードを並べ替え、いくつかのパターンを試しながら自分なりのリズムパターンを作ったり、そのリズムを繰り返し手で打ったりする活動に取り組んだ。リズムカードを用意しておいたこと、また、リズムを「4 分音符」、「4 分休符」、「8 分音符 2 つ」に限定したことが、活動を進めるうえで有効であった。
- ② 作ったリズムを持ち寄り、グループで一つのリズムパターンを作る場面
 - ・ 友だちのリズムを順番に打ちながらいろいろ試していた。教師の「歌いながら打てるリズムを考えるんだよ」という言葉がけを意識し、歌を口ずさみながらリズム打ちをする姿があった。時々、「難しいなあ・・・」、「これは打ちにくい・・・」などと言う声もあったが、リズムを簡単にしたり、打ちやすくしたりすることで、だ



んだん歌いながら打てるリズムができあがってきた。

- ・歌いながらリズム打ちをすることが難しいグループに対する支援として、旋律を再生できる機器を用意した。そのことによって、技能面でのつまずきを軽減し、旋律とリズムの関係を大切にしながら活動を成立させることができたことから、有効な手だてであったと考える。

③ 三つのグループで合わせる練習をして聴き合う場面

- ・歌、リズム、聴き役に分かれ、順番に演奏したり聴き合ったりしたが、役割がはっきりしていたので、スムーズに行うことができた。また、歌に合わせてリズム打ちをする際、技能面でのつまずきの少ない児童は、自然に歌いながらリズム打ちをする姿が見られた。しかし、聴き役の子どもの感想の発表の仕方や発表内容にやや不十分な面が見られた。このことから、聴く観点の明確化や自分の感じたことを自分の言葉で表現すること等にかかわる指導に課題があることが示唆された。

(2) この事例から明らかになったこと

- 一人ひとりの1小節のリズム創作は音楽の基礎力を身につけ、それを生かす場面につながるので大切である。
- グループごとにリズム作りをするときに、「リズムカード」や「ホワイトボード」の使用は、グループ全員でリズム作りをしたりそのリズムを練習したりする際に、リズムが一目でわかるので効果的である。
- リズム打ちをしながら歌うことは難しい面もあるが、それが可能な手だてを講じることによって、より楽しい歌唱表現・音楽表現につながっていく。
- まとめの場面でKくんが「前よりも楽しい『風になりたい』になってよかった。」と発言していることから、歌唱表現にリズム伴奏を取り入れたことは、音楽表現の幅や楽しさを広げる有効な手だての一つとなり得ることが示唆された。

4 来年度への課題

- 歌唱とリズム打ちを合わせて学習を進める際、何の学習に重点を置くか（ねらい）を明確にする必要がある。例えば

A 歌唱に重点を置く場合

リズム打ちにかかわる技能面でのつまずきを軽減する手だてや、楽曲の持つ雰囲気や旋律を構成するリズムの分析に基づいたリズムパターンの教材化が大切。

B リズム打ちに重点を置く場合

既習の歌唱曲を使うなどして歌唱にかかわるつまずきを軽減し、リズムのつながりやリズムの重なりのおもしろさに意識をむけられるようにすることが大切。

C リズム創作に重点を置く場合

歌唱曲から感じ取った曲想をもとに、児童が自分なりの表したい雰囲気を決めだし、その実現に向けて試行錯誤する活動が大切。

このような視点を持ち、来年度も児童の実態や興味関心を大切にしながら、ねらいを明確にした授業実践を積み重ねていきたい。